

「岡山県九条の会」発起人に聞く②

「戦争はイヤ！」

一人ひとりが“今”声を出すとき

岡山県婦人協議会会長 水野三重子さん

軍靴の音に踏み
にじられた時代、
夢も希望もない
青春

それが戦争とい
うものでした

私くらいの年配の人は、「私は軍国少年だった」「私は軍国少女だった」といわれるのをよく聞きます。つまり戦争を美化して、お国のために死ぬことはいいことだと教えこまれた人間だということ。私は日本が戦争に突入するまで、軍国教育は受けませんでした。少し時期がはずれていたのです。生まれが一九二四年で、戦争が始まったときはすでに成人していました。

ですから一九四一年（昭和一六）二月八日に開戦のニュースを聞いた時には、「これは困ったことになった」と思いました。すぐに日本は負けるんじゃないかと思いました。

その頃、私は東京で学生生活を送っていました。戦争に向かってひた走りする時代でしたが、若者たちの中には無謀な戦争に対する不安感ばかりでなく、帝国主義による侵略戦争ではないかと、ひそかに考えていたものも結構いたのです。でもそんな思いは高らかに響く軍靴の音に踏みにじられたのですが。

私は自由な家庭で育ちました。父は東京生まれで都会のセンスをもっていましたから、当時の言葉でいえばハイカラな家庭でした。当時としては珍しい食卓はイス、テーブル。万事がそうだったために、海外の事情もある程度わかっていたように思います。父は開業医でした。本を買い込むのが好きで、私の少女時代は父の書棚から手当たり次第本を探し出して読みふけたものです。父は早くなくなりましたが、当然のこととして、女学校だけでは終わらないと家族みんな考えていて、私は東京の専門学校（実践女子専門学校英文科、現：実践女子大学）に入学しました。

入学と同時に戦争が始まり、英文学など勉強することがだんだんはばかれる時代になっていきました。英文科に有名な教授もおられました。外国人のそれはそれはやさしい女の先生

もおられましたが、十分授業をうけることはできませんでした。それどころか、三年の学生生活は二年半でうち切れ、男子は学徒動員になったのです。戦争は学ぼうとする若者の芽を容赦なく摘み取ります。

卒業してすぐに日本銀行に入りました。日本銀行が女子の専門学校卒を求めたのは、男子役員が次々召集され、その穴埋めとして、特に校風が質実剛健と名を売った実践女専を選んだのだと思います。東京で働いているうちに、たびたび空襲がありました。私の住んでいた地域では当時はまだ被害などほとんどなく、アメリカの飛行機が東京上空を飛んだということでしたが、それにおびえて東京暮らしをうち切り、日本銀行本店から、岡山支店に転勤しました。

戦争が終わって、自分の手に明日が戻って
くる。こんな嬉しいことはめったに

昭和二〇年八月一五日の終戦は、日本銀行岡山支店で迎えました。終戦より二か月足らず前の六月二九日、岡山の空襲のときはまだ日本銀行に勤めていました。あの朝、引き留める母を振りきって、通勤のため伯備線に乗った私は、中庄の駅で降ろされ、岡山までテクテクと歩きました。途中、煤で真っ黒になった人たちが避難していくのに出会いました。

ようやく岡山駅に着くと、街は焼け野原。



駅の周りには焼けこげた死体が積みまれ、路面電車の電線が鉛細工のようにぶら下がっていました。普通なら駅からは決して見えない日本銀行の建物がポツンと建っているのが手にとるように見えました。そのまま帰るにも帰れず、三日ほど焼け残った知人の家に泊めてもらいました。

終戦と同時に仕事を辞め、縁あって結婚したのですが、結婚相手としてふさわしい年頃の男性はほとんど戦死し、結婚が難しい時代でした。私の夫は二歳年下。昭和五年岡山大学医学部卒で、戦争をようやくくぐり抜けてきた人でした。夫の同級生には軍人さんが多く、話が合わないとよくこぼしていました。私にとつて幸せだったのは、夫が私の生家で開業してくれたことです。父の残した診療所を使ってくれました。こんな田舎での開業は、学生時代赤旗を振った彼のヒューマニティーによるものだと思います。私にとつては自分の生家ですし、住み慣れたところという気楽さもあって、家庭の主婦がいろんなお稽古ごとをするように、つまり趣味の一つとして婦人会に入りました。それが今では婦人会そのものが私の人生になってしまいました。

戦後民主的な婦人会が立ち上がった、人々の暮らした平和を守るため」

婦人会はよく誤解されるのですが…。「戦争に協力した国防婦人会や愛国婦人会と同じではないか」と。でも戦後新しく結成された婦人会は戦前の婦人会と全く違います。民主主義国家としてスタートを切った人々の暮らした平和を守るためにつくられたものです。名前が同じというのが私は非常に残念だと思いますが、内容は違うんだと改めて強調したいのです。

さらに全国的な組織をもつ団体として、沖縄県が全国の米軍基地の七五%の基地を抱えて苦しんでいることを、仲間の苦しみとして痛みを分かち合うことができるのです。この度、基地縮小の問題が起りましたが、この辺りで、沖縄の人たちに同じ日本人として負担を軽くすべきただと、私たちは考えています。全国の婦人会員に呼びかけて、米軍基地縮小の署名運動を展開しました。先日、三二万人分の署名を衆参両議院に提出し、内閣の要人に直接会ってお願いしたところです。

憲法は一度変えたら、止めどなく…

北朝鮮がテポドンを発射する。そんなニュースが伝わると、日本の防衛力はどうか。やはりアメリカに守ってもらわなければという声

が起きます。憲法を変えると、自衛隊は軍隊に変えるという意見が当たり前になる。そのうち日本はアメリカの軍事戦略の一部に組み込まれる。そんな時代がくるのではないかと、それも近い時代だと思うと、居ても立ってもおられない私です。

あんなにひどい目にあつたのに、私が生きている間に再び戦争に関わるような、つまり戦争を容認するようなことになるとは夢にも思っていないませんでした。あんなに戦争でやられて、懲りて、もう絶対に戦争はしないと誓っていたものを、いま憲法を変えてまで、一歩でも戦争に近づこうとする気配を見せることが許せません。

一人ひとりの声を集めて国を動かそう

日本は今のところ、国民の声に耳を傾ける仕組みをもつ国です。戦争は風化しようとしても、「戦争はイヤ」と、一人ひとり声を上げることができません。その一人ひとりの声をまとめて国を動かすのは、全国組織をもつ婦人会の役割だと考えています。戦争にはいかなる正義もありません。私たちは平和を守る勇氣と平和を守る行動を起こそうではありませんか。

(二〇〇六年六月二三日 総社市の自宅で

聞き手・記録：成田宣子)